

心の復興に向かって② コンクリート巨大防潮堤計画

震災から半年が経過した頃、私はある報道に驚愕しました。東日本被災地の沿岸に、場所によっては高さ十五メートルにもなるコンクリート巨大防潮堤を建設する計画です。

震災前にも漁港を守る防波堤や数メートルの防潮堤、さらには三〜四百年の歴史を有する松林が存在しましたが、今回の大津波でそれらはことごとく破壊されました。岩手県宮古市田老地区では高さ十メートルで二層構造のコンク

リート防潮堤が破壊されましたし、同県陸前高田市の高田松原も海岸線二キロに亘って植えられた七万本の松林が、たった一本しか残らず「奇蹟の一本松」と呼ばれるようになったことは有名な出来事です。

◇ ◇

過ぎず自然の特徴を活かした街作りができれば、都会にはない良さを活かす復興ができると感じてゐました。さらに、人間の叡智をもつてしても自然には決して敵はないといふことを、そして人間の創造する物には完璧な物など存在しないことを、誰しもが再認識させられたのが今回の震災。さう感じてゐたので、この計画はなんて知恵のないことだと思ひました。後に、この計画は各沿岸住民に困惑と利害対立を生むことに

高橋 知明

なります。

防潮堤の建設は、震災後の平成二十三年七月に政府の中央防災会議が指針を示し、それを基に各地の想定津波高を設定、地元自治体が住民の合意を得ておこなふ仕組みになってゐます。今回の防潮堤建設計画で示した想定津波高は、百年に一度来るであらうと言はれる津波に対応するもので、今回の津波のやうに千年に一度来るであらう津波に対応するものではありません。

◇ ◇

人口減少が確実に予測される中、コンクリートの耐用年数が過ぎた後、補修する予算はあるのか。住民は高台移転を希望してゐるのに、人の住まない土地に巨大防潮堤は必要なのか。目の前に壁ができることで、景観が悪くなるだけでなく、海と人の生活文化が衰頹するのではないか……などさまざまです。

一旦政府が決定した計画を根本から見直すといふことは困難なことです。闇雲に反対するのではなく、国民が納得できるやうな折衷案や代替案はないのだろうか。そんな折に知ったのが、横浜国立大学の宮脇昭名誉教授が提唱してゐた、「瓦礫を活かした森の防潮堤構想」でした。この構想は、私にとって再び大きな衝撃となったのです。

こもれび

震災直後、私が見た海岸線の印象は、何百年前かの地形に戻つたといふものでした。津波といふ自然現象によって自然の地形に戻つた——だから将来を考へて人の手を入れ

また、この計画を進めるには他にも疑問があります。漁業が主産業の東日本沿岸で環境への影響はどれくらゐか。



たかはし・ともあき

公益財団法人 瓦礫を活かす森の長城プロジェクト事務局